そもそも地理学会会員には，さまざまの質があるのをどう扱うかといった原則論まであり，当分なやまされそう。

④ その他の仕事：数年来結論に達しえなかった学術用語選定委員会の地理学用語を，今年こそは最終決定すべく，まとめの世話役を買って出た。働いてもらった何人かの卒業生諸君にも間もなく決定版をお送りすることができる。

⑤ その他―学校教育制度について：長男が来年高校という年齢になり，子供と遊ぶだけの無責任な親では，現在の世の中においては子供にかわいそうであるというので，少しはまじめに学校群だとか3科目だとか，入試法改定の問題点に関心をもちはじめることにした。しかし検討すればする程改定案には賛成しがたい。

現行法ももちろん不可。高校の学区制に対しては，自宅に最も近い学校を受けさせること。試験科目は9科目（中学の全科目）全部とし，平均95点位とれるような問題を出す。それでも差ができるはず。もし全員満点であればアミダで合否をきめる。大学の入試もこの方式がいい。

とにかく誰がみてもわかる理想とはかけはなれた現在の日本の教育制度（有形無形の既成のワク，習慣・惰性……にしばられた）について，いつも何とかならないかとジリジリするばかりで，親は当面自分の子供だけはうまく通りすぎればよいと思ってしまう。何とかならないか。

☆ 式　正 英

お茶の水大学に赴任して以来，満7年になる。始めの4，5年の間は，いつになっても水になじまぬ感じだったが，これはどうも講義題目にも関係があったようで，集落地理学のバトンを渡してからは，すっかり本教室に定着してしまった感じである。

学部の講義は今年で，地形学が2回目，地図学演習が5回目，日本地誌が2回目，写真地理学が4回目，一般教育地学が3回目で，いずれも自分の専門に関係の深いものであり，講義題目に不満の持ちようもなく，せいぜい内容の充実に力をいれたいと思っている。

今年から発足した大学院の講義は，学生諸君の要望に従って，R・F・フリントのグレーシャルアンド・プライストシーン・ジオロジィの講読をすることにした。同書はかつて私自身，氷蝕地形の研究をしていたころ頼りにしていた本の改訂版であり，氷蝕山地の仕事から離れて10年にもなるので，今更此の種の勉強が復活できるとは思っていなかっただけに，懐旧の情もあって大変有難いように感じている。

以前には，一般教育地学は，1年間に同じ半年講義を2度やったとのことであるが，今は半年講

義を1度でよいことになっている。そのためか受講学生百数十人が一堂に満ちて，この時ばかりはマスプロ大学さながらであり，教師稼業の実感が胸にせまる。

地理学巡検は今年の分をいれて８回目，２回ほど前からなるべく遠くへ足をのばすよう心がけている。１９６３年度は中・南九州，１９６４年度は下北半島をまわった。今年の夏はパンパシフイック・サイエンス・コングレスで日がとれず，来春にでもと思って計画中である。卒論題目もこれまでの定式を少しづつはずして，地域の個有のテーマに重点を移すことになったので，指導も本格化しなければならず，成果もヴァラエティに富む様になるだろう。フィールドの担当は庵原山地（静岡），伊那盆地，松本盆地北部，南部，土器川扇状地（香川）の５カ所であり，相変らず夏から秋にかけこれらのフィールドに頻繁にでかけることになる。昨年暮に手に入れたトヨペット・コロナも，ようやく4,０００Kmの経験を積んだので，大いに活用したいと思っている。

研究室の主な仕事は，数年来ひきつづいている都市地盤調査に関連した低地の研究であり，研究生や大学院学生の助力を得てすすめている。地図学演習では岡崎助手が細かい技術的指導にあたってくれるので，かなりのハード・トレーニングを実行できるようになってきた。空中写真判読器材も最近整ってきており，ステレオトップ，スケッチマスター，パララックスコンバーターも備えられた。蓄積のかなりある空中写真資料を活用する目的で，今年は地理学的判読に必要なステレオグラムを多数作成しようと目論んでいる。そのためアサヒペンタックスの複写装置を設備することにした。（１９６６年5月２９日）

☆ 正 井 泰 夫

月日のたつのは早いもので，お茶大に専任として勤め出してから，もうすでに２年もたった。非常勤の期間を含めると，２年半経過したことになる。廊下をおそるおそる歩いていた時代は過ぎさって，今では平気な顔をして歩けるようになった。「時が解決する」というのはこういうことかと思ったりする。

最近は，「アメリカ地誌」と「都市地理」に重点をおいて研究を進めているが，前者の方は，帰国以来５年半の年月がたった故，もう実感として調査研究をすることが困難になってきた。アメリカに対する印象は，主観的なものさえ，客観的事実となってしまいそうなので，皮相的な事象以外については，アメリカの研究をしない方がいいのではないかとも時折考えるようになった。

そのようなこともあって，最近は主として「都市地理的」なことに興味の対象を求めている。「都市地理」でなく「都市地理的」と書いたのは，狭い意味での都市地理でなく，農業・農村・工業・地形・気候・植生などをも含めて総合的な広い研究対象を指向しているからである。